

コダーイ・メソードに基づく 鍵盤ハーモニカ演奏のグループ指導

柏瀬 愛子

Group Guidance in Key-Board Harmonica Performance on the Basis of Kodaly Method

Aiko KASHIWASE

はじめに

前報においてコダーイ・メソードの原則をふまえた器楽指導（ピアノ個人レッスン）の実践経過を報告したが、今回は幼児集団の一斉保育の中で鍵盤ハーモニカ（以下ピアニカという）の演奏指導を試みたのでその経過を報告する。

この鍵盤ハーモニカは、ハーモニカとオルガンを組み合わせたような楽器で、型も小さくその取り扱いも容易である。そこで、音楽教育が盛んになりだした昭和40年頃から、幼児、児童の旋律楽器とし教育の場で急速に普及したものである。その音楽的特性は、

1. 鍵盤楽器（ピアノ、オルガン、エレクトーン、アコーディオンなど）としての学習効果があげられる。
2. リード楽器として演奏活動の中で、アンサンブル効果を高めさせることができる。
3. 演奏しながら、タンギング、ブレッシングをはじめ、正しい呼吸法を知ることができるので、各種管楽器奏法の基礎を体得することになる。

K園でこのピアニカの指導を試みることになったのは、幼児音楽研究会での仕事（リズム感の発達調査）でK園に出入りしているうちに、たまたま使用するピアニカに園児たちが異常な興味を示したことから、園に特色をつくりたいという園長先生の依頼からである。

I ピアニカ演奏の指導実践報告

1. 指導した子どもたちについて

- 1) 対象児。名古屋市中村区K幼稚園年長児（男子9名、女子11名、計20名の1クラス全員）で、2年保育児ばかりである。
- 2) 家庭環境。K園は、国鉄職員官舎の中にある園で、設立の条件として「国鉄職員の子弟のみを入園させる」となっている関係から、全園児の父親の職場が、仕事の内容こそ違え皆同じ国鉄関係であるため、その生活程度はほぼ中流と認められる。

両親の年齢は比較的若い層が多く、その学歴については、中卒から大学卒とさまざまであるが、子どもの教育に対しては大変熱心である。（音楽に対する関心度はあまりないように見受けられた。このことは、家庭にある楽器類、テレビの視聴番組、ピアノ、オルガン等の稽古ごとに通う子どもの数、家庭における音楽鑑賞の内容や度合いなどの調査から判断したものであって、直接親の意見を聞いたものではないから真実性は高くはない。

家族構成は、いわゆる核家族型で、両親と子どもたちがほとんどである。指導対象とした年長児の20名について詳しく述べるなら、17世帯が両親と子ども、あとの3世帯に祖母2、祖父1が同居されているといった状態である。

兄弟数は2人 13名（長子8名）、3人 3名（長子2名、末子1名）、1人っ子が残る4名と、比較的1人っ子が少なく長子が多かったのに驚いた。（この中で姉がピアノを習っている、オルガン教室に行っているという者は、各2名ずつであった。園児自身では女兒3名、男子1名がオルガン教室に4月より行きだしていた。）

- 3) 生育歴. 入園時の育児調査によって調べたものであるが、全員、出産時もまたその後においても、これといった異常は認められず大病歴もなかった。
- 4) 知能（IQ）. 知能発達や、音楽性の発達は、環境・素質との係りあい大きいといわれる。ピアノ演奏指導に先だて、子どもたちの能力発達を知っておくために、田中ビネー式検査法を利用して、昭和51年4月に知能テストを行ってみた。個々の結果については、今回の報告内容とあまり関係しないので省略するが、田中ビネー式7段階等級別に分けて結果を記す。

I Q 61—76（下知、劣）1名
77—92（平均知下）2名
93—108（平均知中）13名
109—124（平均知上）3名
125—140（優、上知）1名

この結果からみて数名の優れた子どもがいることや、ほぼ全員が正常な知能発達をしていることがわかった。

- 5) 音楽性. 音楽性の定義づけはむつかしいものであるが、「音楽がよくわかること」また、わかったなら「音楽を楽しみそれを生活の中に役立てることができること」いえよう。このことをふまえて分析的にその内容をみると、
- イ) 音の音高色別の能力。（音の強弱、長短、リズム、ハーモニーなど音がもつ属性を判断するというもっとも基本的な能力）
- ロ) 楽曲の理解。
- ハ) 感情体験からくる適当な音楽表現。
- ニ) 身体表現。
- などができる能力となる。

そこで、イ) については、アーノルド・ベントリーの音楽能力測定法によってテストを行ない個々の能力をみたが、このことも今回の内容とは直接関係がないので結論のみを記すこととするが、各部門とも、芳しい成績とはいえないようなものであった。ロ) については、レコードや、歌を聞かせることから、子どもに現れる行動や変化を見ることと、曲について何を感じるかを話し合うことから判断してみたが、これもまだ十分なものではなかった。ハ) については、園で普段行なわれている歌唱表現や打楽器の演奏表現などで判断してみた。歌唱表現は毎日何らかの形で経験されているため、かなり曲のイメージをつかんだ歌い方がされていた。打楽器演奏では、自由に表現することより、指導者（クラス担任）の指示に従うことの方が多いのと、演奏活動自体が少なく判断をもつ機会が得られなかった。ニ) については、ピアノ演奏

指導と併せて行なっていた。リトミック指導の中で現われてくる子どもたちの反応から判断していったが、回を重ねるごとに自分の心に感じたままを身体で表現することができるようになっていった。

2. 指導の実際

- 1) 指導の期間。昭和51年4月～9月までの6ヶ月間。週1回、1時間を原則としたが、指導者の都合で指導に行かれないこともあり、週2～3回続けて行なうこともあるなど、大変、不規則な指導となってしまった。しかし、前回指導したことはクラス担任の保母によって、毎日1回は必ず復習するということを義務づけておいたため、期間があいても、子どもたちが前のことを忘れてしまっていたということは1度もなかった。また、1回1時間の内容は、リトミックや遊びなども含めた時間であり、楽器練習の正味時間は長くて30分程度、短い時は10分程のこともあった。

2) 指導の段階

- イ) 第一回目。練習にあたってピアノカを理解させる。

子どもたちが遊んでいるとき、ひまわり組(年長児のクラス)の黒板に向かって大きくピアノカの絵を書き始めると「何書いているの」「あ、知っている、私の家にあるわ」等々言いながら次々に傍に寄ってきた子どもたちが、こちらの意図した状態となっ

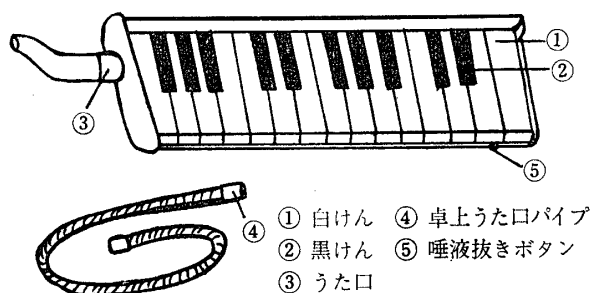


図1 ピアニカ

たところで、ピアノカの部品、名称の中で吹奏する上に必要な個所の名称を教える。教えた部品個所とその名称

次に子どもたちと共に、指導者が吹奏するピアノカに合わせて歌ったり、踊ったり遊んだりする。

- ロ) 第二回目。ピアノカの扱い方になれさせる。

ピアノカを全員に持たせ、その出し入れの練習や、うた口にうた口パイプをつけたりはずしたりする練習から入る。次に、吹奏するときの正しい姿勢「[肩の力を抜き楽にピアノカを持ち胸を張って吹奏する]」のだが、初めて経験する幼児の場合、ピアノカを胸の前に持って吹奏することには少々無理があるので、卓上パイプ使用時の姿勢「背をのぼし、腰の方に力を入れ、パイプの先のうた口を左手親指と人さし指で軽くつまむ」や、その他の注意事項「[吹奏前の口ゆすぎ]」「うた口のくわえ方(口びるにうた口が直角に当るようにし、浅くくわえる)」「[つば抜きの仕方]」を教える。次いで自由な音出しあそびをさせて楽しむ。

- ハ) 第三回目。指あそびと呼吸あそびをさせる。

この両者は、吹奏する鍵盤楽器という特徴をもつピアノカにはかかせない練習事項である。故にただ一度の練習で終るものではなく、継続的に指導されてこそ理解し自

分のもとされていく。そうしたことから、以後毎回反復指導されることとなるが、特に初めてのこの回では全部の子どもに理解されるように丁寧な説明と楽しいあそびにした指導を時間をかけて行なった。

指あそびとは鍵盤楽器演奏時の指使いを知るための活動である。

- 指番号をおぼえる。ピアノの場合左手は使わないので、右手のみ教える。
- 指出しあそびをする。指番号と弾く音を結びつけた即興歌をうたいながら、呼ばれた指を出していく。
- 机たたきのあそびをする。呼ばれた指で机を軽く打つ。



図2 指番号

曲例1 指あそび即興歌曲

2/4

いちばん さん は おとうさ ん

にいばん さん は おかあさ ん

さんばん さん は おにいさ ん

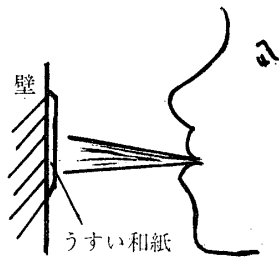
よんばん さん は おねえさ ん

ちいさい あかちゃん ごぼんさ ん

なかよく みんなで そふあみれ ど

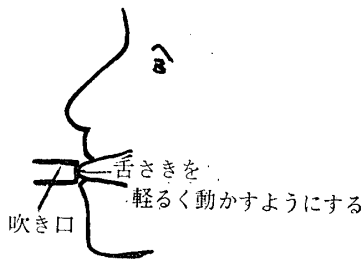
- 良い手の形。オルガンを弾くときと同じ指示を与える。（前報のピアノ指導テクニック・指、腕運動を利用する。）

呼吸あそびは、ピアノは「吹く」「息だけで発音される楽器であるから、ハーモニカのように「吸う」という動作がない。そのため息の量が必要となってくる。また呼吸の仕方、息の吹きこみ方によってその演奏はきれいにもなるし、きたなくもなる。そこで、息を大きく吸っておなかにためること。その息を少しづつ吐くこと。すなわち腹式呼吸の練習をはじめ、なめらかな音を出すための練習（息を細く長く吐く）や、tutu といいながらタンギングをする練習を行なった。



口びるを丸くし細く長い息をしながら壁にあてたうす紙を落さないあそびをする。

図3 息を長くもつ練習

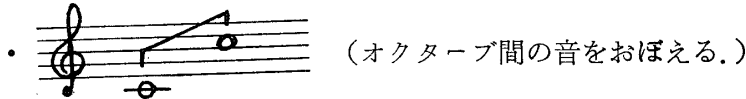


吹き口の先きを舌の先きで tutu いいながら閉じたり開いたりする


図4 タンギングの練習

二) 第4回目以後の練習。耳から音を知るために。

今までにしたことの復習をしていくとともに、音さがし（ \dot{C} 音から \dot{C} 音までのオクターブ間の音を1音ずつ順序立てておぼえること）をする。



ステップ1 「ド」をおぼえる。

指導者が単音で  を弾く。子どもたちは自分のピアノカを使って同じ音を捜し出す。この時どんなに時間がかかっても、自分の力で捜し出すまで待ち、決して「この場所です」と鍵盤上の位置を教ええないことにした。こうして全員が指導者の出す \dot{C} 音を捜し出したとき、音名「ド」であることを教え、頭に「ド」の字のつく言葉あそびをする。「どんぐり」、「ドーナツ」、「ドロップ」などの出された言葉に即興的なリズムづけをし、となえあそび、手たたきなど、ユダヤ・メソードの方法に基づく体験を与える。

次に1の指から5の指までを順に使って音出しあそびをする。これを全員の合奏で、あるいはグループ別に、あるいは1人でというように吹奏させる方法をとって練習させた。

曲例2 音出しあそびに使った曲（指の指示 1で、2で、3で、4で、5で）

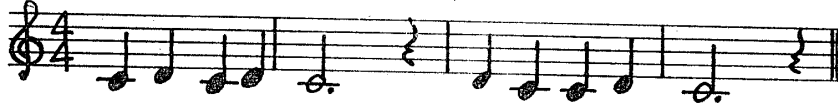


ステップ2

ステップ1と同じ過程を通して「レ」をおぼえる。次に「ド」と「レ」の2音を使

って即興曲を弾く。(バイエル教則本右手練習曲も使用)

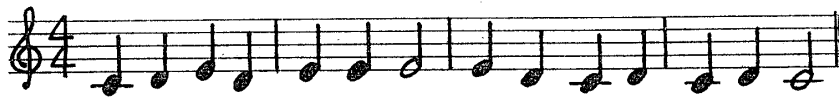
曲例3 2度の練習(指の指示 1と2, 2と3, 3と4, 4と5,
1と3, 1と4, 1と5)



ステップ3

ステップ1, 2と同様にして「ミ」をおぼえる。次いで3音を使った即興曲を弾く
(バイエル教則本3度の練習曲も使用)

曲例4 3度の練習(指の指示 1~3, 2~4, 3~5)



ステップ4

「ファ」をおぼえ4音を使った即興曲を弾く。(バイエル教則本4度の練習曲も使用)

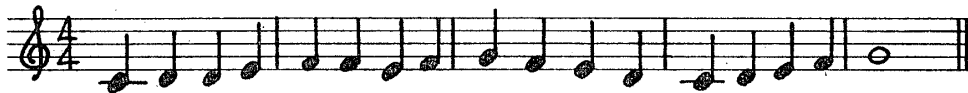
曲例5 4度の練習(指の指示 1~4, 2~5)



ステップ5

「ソ」をおぼえ5音を使った即興曲を弾く。(バイエル教則本5度の練習曲も使用)

曲例6 5度の練習(指の指示 1~5を正しく使う)



ステップ6

「音とび練習. 即興的に, あるいはバイエルの練習曲から選んだものを使って行な
った.

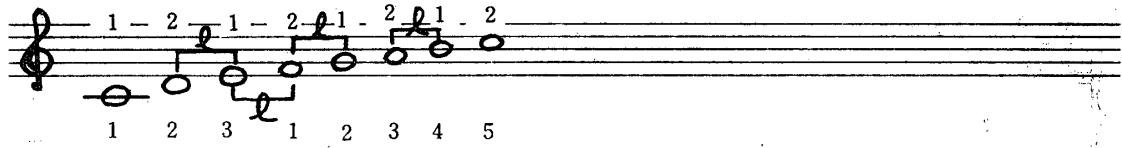
曲例7 音とびの練習



ステップ7

トンネルくぐり(音階奏の練習) 5音より多くの音をスムーズに弾くための練習
で, 音階の途中で指をかえてゆくことを知らせるものである.

曲例8 音階 (ℓは指くりの記号)



1と2の指だけで弾き進む方法と、1, 2, 3の指で指くりをし1~5までを使う方法(ピアノ、オルガン奏法に準じる)の2例を練習させた。

ステップ8

いろいろな曲を弾いてみよう。

今までにも、即興曲と合わせて、子どもが知っている歌の中から弾きやすく、指導した段階に応じた音構成である旋律をとりだし吹奏させてはいたが、ステップ7が終わったところで、はじめてまとまった一曲を与えることにし、きらきら星、ちょうちょう、むすんでひらいて、などをとりあげてみた。

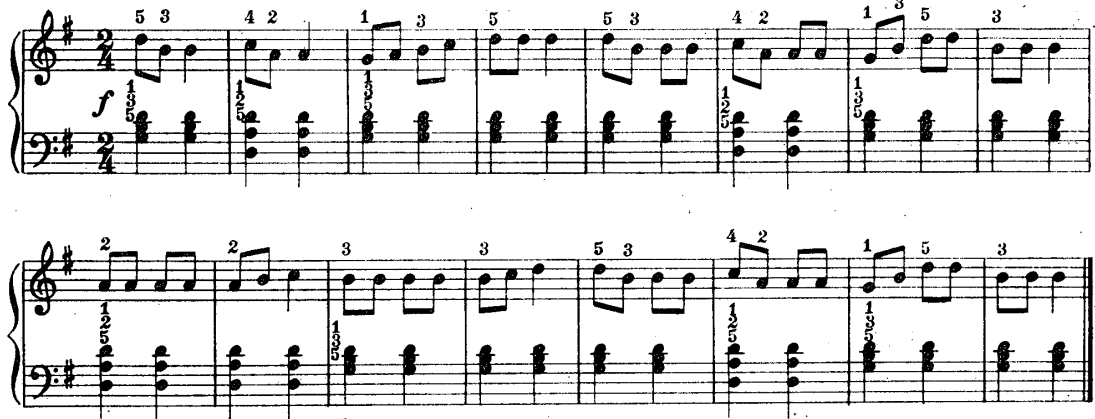
曲例9 知っている歌

上段の旋律を子どもたちに吹奏させ、下段の伴奏音は指導者が奏する。

きらきら星



ちょうちょう



むすんでひらいて

以上のことを完成させるのに約4ヶ月を要した。1音、1音、子どもたちが自分で音を捜し出してくれるまで待ったことは、実に忍耐のいることではあったが、そのおかげで、耳から音をきくことは、どの子も完べきといってよいものとなった。そこで今度は、読譜の力をつけるための活動を行なう。

ホ) 読譜力をつけるための練習

5本の線は「音符の家」という仮定のもとに「5線」と「ト音記号」を理解させ、次いで5線上の音符の位置を知らせるために、ステップ1から7までの過程をくり返す形で指導していった。その方法は、指導者が音出したのと同じ音を子どもが音出す。その間に5線上の位置に音符を書き「いま皆が出している音はこの場所ですよ」という説明を与えた。また、床の上に5線を書き子どもたちが音符になって出された音の位置に並ぶという「場所とりゲーム」などの遊びや、個々に5線紙を持たせ「おはじき並べ」「音符書き」などをさせながら、音と音を表わす音譜の関係を知らせていった。こうしてC音からC音までの間をくり返し練習し、ほぼ理解されたと思われた頃「メリさんの羊」の楽譜を渡し、これを見ながら演奏する経験を与えてみた。知っている歌であったことも手伝い、全員スムーズに完奏された。

曲例10 メリーさんのひつじ

このようにして、耳からききながらでも、また目で見ながらでも演奏可能になった子どもたちは、ピアノを吹奏することの楽しさを指導開始からわずか6ヶ月の間ですっかり身につけてしまった。今では、黒板に書いた楽譜を見たり、指導者が弾くピアノの音を追っかけたりしながら、自由にあるいは一斉にその演奏を楽しみ、子ども

たちの手による打楽器との合奏も試みられた。

考 察

1. きかせることの大切さ

従来、幼児教育の場で鍵盤楽器（主として木琴）を使わせるときには、色音符指導（田中すみ子氏考案によるもので、音名にちなんだ色付け ≪ド＝赤，レ＝黄，ミ＝緑，ファ＝だいたい，ソ＝空色，ラ＝紫，シ＝白≫ で表わす方法）がもっとも多くとられてきた。この方法は、色シールを鍵盤上に貼ってその位置を示し、同時に色刷した楽譜を渡し、指導者が手をかけなくても子ども自らが、色合わせをしながら弾いていくことができるものである。一見、合理的に見える方法であるが、鍵盤上に貼ったシールがとれてしまうと頼るものがない不安さからか、自信をもった弾き方がされなくなる。故にどれだけ練習させてみても、その演奏は芳しいものとはならない。

弾くことを前提としたとき、音が理解されなければ、どうにもならない。耳できくことは鋭い音感覚を身につけていくといわれるように、「きくこと」は音楽経験の中で一番大切な過程である。

本来、楽器はポジションを見ながら演奏するものではない。音を確かめながらより正しく美しい音を求めて弾くものである。こうしたことから、ユダーイ・メソードによる指導は、もっとも適した方法であるといえよう。その第一条件である「うたうこと」「きかせること」に十分時間をかけ、1音、1音、自分の能力でききとった音を捜し出されたとき、「心でききながら奏する」意識が高まり、その音を自分のものにしきるのだといえよう。

2. 一斉指導を行なうときの問題点

集団を相手に旋律楽器の演奏指導を行なうとき問題となることは、

- 1) クラス全体の子どもが本当に楽器を理解し楽しんで活動に参加しているのかどうか、わかりにくいこと。
- 2) 正しい音出しがされているのかどうかということが、指導者にも、子ども自身にもわからない場合があること。
- 3) 能力（理解力、応用力、技術力）差によって、興味の持続時間が異なるため、それを調整していくことがむづかしい。
- 4) 「まとまりよく弾かせたい」という指導者側の欲望から、次第に強制的態度で子どもに接しだし、子どもの気持を無視したカリキュラムを組み、音楽を楽しむというより、楽器演奏の練習という形になってしまいがちなこと。

の4点があげられると思う。

今回の指導実践に際しても、鍵盤楽器の練習ということから、はじめはなじめない子どもも数人いた。このことは、問題点の1)に該当するものと思われるが、曲らしいものをとりあげて演奏させるでもなし、あそびごとを多く行なっていたことが幸いしたのか、次第に興味を示し、6回目頃からは誘わないでも練習に参加するようになっていった。2)の問題点については、個人的に演奏させてみることによって解決することであるが、時間がかかりすぎて、興味の持続時間の短い年齢にある幼児集団には少々無理が感じられる。もし行なうとしても、毎回、全員を対象とすることは不可能であり結局あいまいで終ることになりかねない。今回も、指導する過程の中で何度か個人レッスンのような方法をとって見たが、順番を待つまでに自分で稽

古するんだといって音出しをはじめの子、すんでしまって騒ぎだす子、その騒がしさに、かえって音がわからなくなり中断させられる羽目に落ち込んだ。また、まちがっていると思われる子だけを指名してやらせた場合、劣等感を抱かせる原因ともなり、ひいては練習を嫌い、音楽嫌いにでさせてしまう心配ももたれる。

大変むつかしい問題であり、今後の研究課題ともなろう。3)、および4)については、指導者の細心の注意と努力をもって緩和されるものと思われるが、それなりの経験が必要となる。

3. 指導に際し留意すべき点

留意すべき事項は、指導の段階別にあげられるものであるが、ここでは、「自主的に興味をもって練習に参加する」という目標をふまえた上での留意点を述べることにする。

- 1) 楽器に興味をもつような環境をつくり、自ら、進んで活動に参加するようにし向けること。
 - 2) 楽器の扱い方を十分理解させること。とくに姿勢、指使い、呼吸法などに気をくばること。
 - 3) 指導方法を十分検討し、無理のないカリキュラムを組むこと。また、他領域の活動（音楽リズムの4分野「うたう」「きく」「ひく」「動く」をはじめ、幼児の望ましい活動とされる6領域）とも関連させ、総合保育としてとらえるようにする。（楽器の練習に終わらないようにするということ。）
 - 4) いろいろな奏法を会得させるためには、奏法の特徴をつかんだうたあそびをさせる。例えば、タンギング奏法の場合、歌詩でうたうのではなく舌の先を歯の間にはさむようにして「タッタッタッタ」と切っとうたわせるなどする。
 - 5) ただ単に楽器を弾けるようにするだけでなく、音楽を楽しむ、人の演奏を喜んできく態度が養われるようにする。すなわち芸術を愛することができるようにする。
- などがあげられよう。今回の指導においても各段階で出てくる多くの留意すべきことと合わせて、こうしたことへの配慮も常に心がけるようにつとめた。

4. 指導の結果と反省

1) 結 果

一言でいって子どもたちに「音楽を楽しもうという気持ちもたれるようになった」といえよう。指導した期間が6ヶ月という短期間であったが、指導の回を重ねるごとに子どもたちが自発的に練習に参加し、よく「うたい」「ひき」そして音を巧みに捜し出していく様子は、指導者にとっても、また当事者である子どもにとっても嬉しいことであった。10月下旬、ためしに2度目の音楽能力テストを行なってみたところとくに音をきき分ける力の伸びが目立っていたことからみても、その成果は大きかったと思われる。

更にこのピアノの演奏活動が園だけのもので終らず、家庭にも持ち帰られたためか、母親の中にも急速に音楽への関心が高められだした。楽器を理解しようという気持ちからか、指導を見にこられるお母さん方も見られだした。嬉しいことである。

2) 反 省

本学と幼稚園との距離的なことや、指導者の個人的理由もあって、指導が定期的に行なわれず、夏の暑い時期に集中したことは、園側にもご迷惑をかけたことだと思う。また、子どもたちにも不信感を抱かせたようだった。練習ごとは、毎日5分といわれるように、規則正しいく

り返しをすることによって上達がみられるものである。また、その指導も出来るかぎり同一人があたるべきである。上達をみたときには共に喜び、進歩に伸び悩みが生じて壁にぶつかったときには共に苦しみ、励ましてやってこそ、楽器指導を通してコミュニケーションが保たれるのではないだろうか。教える立場、教えられる立場といった関係のもとにあった今回の指導は、そうした面で深く反省するものが残り失敗といえよう。

こうした練習の積み重ねがある楽器指導は、毎日生活を共にする保母の手によって行なわれることが理想的であることを痛感する。

要 約

知能と音楽的能力の相関については、未だ十分明らかにされていない。しかし、鈴木鎮一氏は、「音楽はどの子ども教え方一つで育つものである」、「人間の音感覚は3才頃をもって、もっともよく発達し成人とほぼ同じ能力をもち出す」、「手指の運動は脳の発達を促す」など述べておられる。こうした説からいっても幼児期での楽器指導は大切な活動の一つであり、知能発達の誘因ともなるといえよう。

音感教育にもっとも適しているのが旋律楽器であることはいうまでもないが、中でもとくに笛、ハーモニカ、バイオリンなど、鍵盤をもたない楽器は、自分の耳だけを頼りに音を捜さねばならないので、より絶対音感が身につくとされる。しかし、こうした楽器を幼ない子どもの集団保育の中に採り入れることは容易なことではない。そこで比較的取り扱いがやさしい鍵盤ハーモニカによる楽器指導が、早期音楽教育の叫ばれだした今日、盛んになりだしたのである。

ピアノの演奏がやさしいとはいえ、子どもたちにとっては、そう簡単なことではない。「早くまとまった曲を演奏させたい。」それも「上手に」などと、その結果はあせるあまりに導入をおろそかにし練習を強要すれば、子どもたちは楽器に対する興味を失ないその練習に負担を感じだす。一旦興味を失なったなら上達は望み薄いこととなる。また、このことから端を発して、すべての音楽活動を嫌うようになるかも知れない。（音楽嫌いの多くは、練習の強要とその過程の中でおこる劣等感からだともいわれる。）

子どもの楽器指導は、それがどんな種類の楽器であれ、子どもの心に負担を感じさせることなく、楽しいあそびとして受け入れられるものでありたい。またその練習は、もちろん自発的になされるものであって、強要されてはならない。

こうしたことをふまえた上で指導者は次の事項に留意すべきであろう。

- 1) 十分検討された無理のないカリキュラムによる指導。
- 2) 一度体験させたことは、何度もくり返しを行ない、十分理解をもたせるようにすること
- 3) いたずらに多くの活動を与えず、応用、活用の体験をもたせていくこと。
- 4) 子ども自身に発見させること。
- 5) 楽器の練習としてではなく、総合的な音楽体験を与えるようにすること。
- 6) 「きかせる」ことを大切にすること。

音楽教育はただ芸術教育、情操教育としてとらえるだけのものではない。人間形成の一端を荷なり大切な役割をもっていることを常に心して、その指導にあたらねばならない。音楽することを楽しみ、音楽が好きになる心を育ててこそ、感覚の発達、ひいては知能の発達も促がされるのではないだろうか。

今回のピアノ斉指導では、いろいろのことを体験した。この体験を生かして、いま一度本学付属幼稚園の年中児（4才児）を対象とした指導を、毎日、自分の手によって行なってみたいと思っている。

参 考 文 献

- 1) あらたけひこ：リトミックと音感あそび，白眉社（1970）
- 2) 羽仁協子：ハンガリー音楽教育法，音楽之友社（1971）
- 3) 柏瀬愛子：名古屋女子大学紀要，**22**，215～222（1976）